

宮脇檀の住宅作品における和室の構成要素と役割

日大生産工 ○亀井 靖子

1 はじめに

室町時代から続く畳空間としての和室は、その後庶民の生活に溶け込み、普段使いの空間として戦後もずっと使われてきた。そうした中、現在使われている畳部屋の構成要素や空間構成を観察すると、大きく分けて3種類の和室があることが分かってきた。一つ目が、続き間や縁側などの内外空間と「連続する空間を持つ室」、もう一つが閉じた中に小宇宙を作り出す「茶室」のような空間、最後の一つがマンションなどにある「畳が敷いてある室」である。本報告では、これらを意識的に設計する建築家の平面を分析し、日本建築和室が本来持っている価値を単純・明確化することを目的とする。

その導入として、資料が比較的そろっている宮脇檀による住宅作品の中から、代表作ボックスシリーズの和室付き住宅17件を対象に、平面図による分析を行った。

2 調査概要

「宮脇檀の住宅 1964-2000」^{文1)}に掲載されている住宅・別荘・マンションなど149件から、平面図が雑誌等に掲載されている畳部屋付きボックスシリーズ住宅17件を抽出した。平面図は、「宮脇檀の住宅」^{文2)}、「混構造住宅の詳細 宮脇檀建築研究室の作品30題」^{文3)}、「日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀」^{文4)}に掲載されているものを主に用いた。調査項目は、①和室を特徴づける要素：庭との連続性・縁側・続き間・床の間・仏壇、②一般的な「和」の要素：押入れ・襖・障子・板の間とし、その他、空間として特徴があることについては特出した。また、平面図から、「玄関からの距離」、「公（パブリック）・私（プライベート）」、「生活の方向性」についても読み取り、和室の構成要素との関係性を見た。

表1は、和室を持っている宮脇檀ボックスシリーズ住宅17件の概要である。なお、本調査では、畳が敷いてある部屋を「和室」と定義し調査・分析を行った。

3. 分析結果

3-1. 和室の構成要素と平面構成

畳が敷いてある部屋は全部で23室である。室名は「和室」が14室と一番多かったが、中には「老人室」（1件）・「寝室」（3件）と部屋の役割を限定する室名がついているものもあった。

1階は「庭との連続性」を確保している住宅が12件中6件あり、その中で縁側やデッキを持つものが3件あった。プライベートな和室は庭に面している。

2階の、居間と「続き間」になっている和室は、外部空間までの連続性を確保している。その例として、「シリンダーボックス」、「船橋ボックス」、「三宅ボックス」が挙げられる。図1は「船橋ボックス」の2階平面図である。

「床の間」のある和室は7件あり、基本的に独立した部屋で「続き間」になっていない。「床の間」があり「続き間」にもなっている和室の続き間は和室で、「播谷ボックス」と「松川ボックス#2」が該当する。

3-2. 平面図から見た和室の役割

玄関から遠い「奥」の和室は、居間などのパブリックな空間と「続き間」になる傾向があり、日常ではその和室は「パブリックな空間」として機能を果たすが、襖などの可動間仕切りを締め切ることで「セミプライベートな空間」とすることもできる。

Study on the Items and the Role of Wa-shitsu, Tatami room, in the Houses
designed by Mayumi Miyawaki

Yasuko KAMEI

[illegible]

The image displays two floor plans for the first floor of a house. The left plan features a living room (居間) with a fireplace, a dining room (食堂), a kitchen (台所), a study (書斎), a bedroom (寝室), a bathroom (浴室), a hallway (廊下), a staircase, and a front entrance (玄関). The right plan features a living room (居間), a dining room (食堂), a kitchen (台所), a study (書斎), a bedroom (寝室), a bathroom (浴室), a hallway (廊下), a staircase, and a front entrance (玄関).

— 714 —